

保守のアジェンダへの女性・平和・安全保障の再構成 —— カナダのハーパー政権を事例に

和田賢治
(武蔵野学院大学)

女性・平和・安全保障（以下 WPS）は、武力紛争下のジェンダー不平等の規範と構造に基づく暴力を安全保障問題として認識し、取り組むことを国際社会に可能にした。その構想は、女性の平和運動やフェミニスト研究から生じたものだが、近年、男性や LGBT の人々への対象の拡大と軍事主義への傾倒という二つの変化にさらされている。これらの変化が組み合わさる時、近い将来、LGBT の人々の救済を表向き訴えることによって、自らの敵に対する軍事力の行使を正当化するために、WPS に依拠する政府も現れることが懸念される。本稿は、その潜在的なリスクの下地を解明するために、カナダのハーパー政権下の WPS を考察する。同政権は、フェミニズムに批判的でホモフォビクな支持層のために、もともと WPS と LGBT の人権にそれほど関心を示してこなかった。ところが、次第に援助を通じて女性のニーズに対処するようになり、さらに同性愛者を法的に取り締まる政府を批判し始めた。本稿は、ジェンダー・エッセンシャルリズムとピンクウォッシングの観点から、ハーパー政権が保守的なアジェンダとして WPS を再構成するなかで、いかに LGBT 問題を安全保障化するのか探究する。

キーワード

女性・平和・安全保障、カナダ人の価値、安全保障化、ジェンダー・エッセンシャルリズム、ピンクウォッシング

I. はじめに

国連安全保障理事会決議 1325 (Security Council Resolution 1325, 以下 SCR1325) は、その後の関連決議と合わせて「女性・平

和・安全保障」(Women, Peace and Security, WPS) と呼ばれる¹。同決議が採択されるまで、武力紛争による女性への影響は国連安

1 WPS は、次の 8 つの国連安保理決議から構成される。SCR1325 (2000)、SCR1820 (2009)、SCR1888

保理のアジェンダと見なされてこなかったが、現在では紛争予防や紛争後の和解に女性の声を反映させ、ジェンダーの視点を取り入れるよう奨励される。そもそも、その構想は女性の平和運動やフェミニストの研究に依拠するものであったが (Pratt and Richter-Devroe 2011: 490)、次の二つの変化にさらされている。

一つは対象者の拡大である。WPSは、その名の通り〈女性〉を対象者とする。ジェンダーの視点に基づく分析は、武力紛争下の女性の経験に光を当てたが、見落とししてきたものも少なくない。たとえば、敵対勢力を蔑めることなどを目的としたジェンダー暴力 (gender-based violence) について、初期の調査は女性の被害者に注目したため、男性 (United Nations 2013: 12-3; Carpenter 2006: 96-7) と LGBT² の人々 (Hagen 2016: 315, 318-20) への被害をほとんど考慮しなかった。だが、人々の経験はジェンダーだけでなく、それと交錯するセクシュアリティ、階級、人種、障害、宗教など、アイデンティティを構成する複合的要素により違いを生じさせる。それゆえ、

ジェンダー分析に加えて、その複合性を分析するインターセクショナル・アプローチ (intersectional approach) の採用も国連難民高等弁務官事務所などから提言される (UNHCR 2017: 9; Hagen 2016: 317)。

もう一つは軍事主義 (militarism)³ への傾倒である。2005年からWPSに賛同する政府が国別行動計画 (the National Action Plan, 以下 NAP)⁴ を発表するなか、政府の影響力が強まることへの懸念が生じている (Basu 2016; Swaine 2016)。たとえば、伝統的な安全保障目標を達成する手段、あるいは既存の任務の効果を引き上げる手段として女性兵士の増員を検討する議論が先行する (Shepherd 2016: 325, 332-3; Kirby and Shepherd 2016: 384, 388-90)。こうした状況は、女性の声や女性の非政府組織の専門性を反映させるという初期の構想から大きく逸脱していると言わざるを得ない (Shepherd 2016: 325; Kirby and Shepherd 2016: 384)。

これらの変化が組み合わさるとき、ジェイミー・ヘイゲン (Jamie J. Hagen) は、ジャスピル・プア (Jasbir K. Puar) による「ホモ

(2009)、SCR1889 (2010)、SCR1960 (2011)、SCR2106 (2013)、SCR2122 (2013)、SCR2242 (2015)。

2 本稿は、レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダーの頭字語のLGBTを用いるが、これらのカテゴリーは普遍的なものではなく、性的指向と性自認のグラデーションには注意が払われるべきである。

3 ローラ・シェパード (Laura J. Shepherd) は、軍事主義を信条体系と捉え、武力行使の受容や軍の制度などへの高い評価による「暴力の社会的寛容さを構築する政治問題についての思考様式のひとつ」と定義する。この定義はローラ・シューバルイ (Laura Sjoberg) らの議論に依拠する。「軍事主義とは、『戦争に適切とされるもの』の外部への、一般的な社会的および政治的生活への、戦争関連の、戦争準備の、そして戦争に基礎を置くものの意味と活動の拡張である」(Sjoberg and Via 2010: 7, cited from Shepherd 2016: 325)。

4 2017年8月までに67カ国が国別行動計画を発表している。Peace Women, Women's International League for Peace and Freedom, "Member States" (Retrieved November 18, 2017, <http://www.peacewomen.org/member-states>)

ナショナリズム」(homonationalism)⁵の議論 (Puar 2007) を引きつつ、次の事態が起こり得る危険性に警鐘を鳴らす。その事態とは、過去に武力行使の正当化の理由に女性の保護がたびたび持ち出されてきたのと同様に、LGBTの人々の保護がその理由に持ち出されることである (Hagen 2016: 330-1)。WPSが対象者を拡大させ、軍事主義への傾倒が懸念される現在、こうした事態をいかに防ぐかが今後の運用の課題となる。それを検討するうえで本稿は、前述の二つの変化が並行して生じたカナダのステイブン・ハーパー (Steven Harper) を首相とする保守党政権 (2006年10月から2015年10月) を事例として取り上げる。結論から言えば、前述の警鐘はハーパー政権下で現実のものとはならなかった。ただし、この事例はその軍事オプションを可能にする下地として、LGBTの人権問題が安全保障化 (securitization)⁶ されたという点で検討に値すると思われる。

カナダの保守党はフェミニズムやLGBTに批判的な支持層に支えられ、ハーパー

政権もそれに配慮した内政⁷や外交を行い (Tiessen 2015a; Brown 2018)、NAPの公表にも意欲的ではなかった (Tiessen 2015b)。ところが、同政権は女性と子どもを対象とした援助に力を入れるとともに、2011年からジェンダー分析プラス (gender-based analysis plus, GBA+) ⁸ というインターセクショナル・アプローチをすべての行政機関に導入するなど、比較的早い時期からLGBTの人々をWPSの対象者と見なしてきた。以下では、女性とLGBTの人々の権利拡大や社会進出に消極的と思われた政権が、いかにその保護に取り組むようになったのか探求する。

II. 仲介者から戦士への変身

保守党は2006年1月の連邦総選挙で自由党から政権を奪還した後、ハーパー首相の下で2015年10月まで政権を維持した。両党の違いを簡潔に述べると、自由党は19世紀の結党という歴史を有し、移民を支持層に取り込み、再配分政策を重視するなど中道左派に位置する。対する保守党は、2003

5 ホモナショナリズムは、2001年の同時多発テロ以降の「アメリカの性的例外主義 (U.S. Sexual Exceptionalism)」という帝国主義の新たな形式を示す概念である (Puar 2007: 2-5)。それはLGBTの人権保護を近代性の進歩を測る基準とし、その権利拡大に向かうアメリカとそれに不寛容とされるイスラムとの間に〈白人性の優位性〉(ascendancy of whiteness) という人種化されたヒエラルキーを構築する。プアの議論も含め、国際関係論におけるLGBTの研究動向とクィア理論の影響については別稿で論じた (和田 2019)。

6 安全保障化理論は、非軍事イシューにおける特定の客体を“脅威”として聴衆に認知させる発話行為を分析する (Buzan et al. 1998)。

7 2006年に女性の地位庁 (Status of Women Canada) の予算は1300万ドルから500万ドルにまで削減され、16あった地方支部のうち12が閉鎖された (Collier 2014: 28)。また、2013年のトランスジェンダーに対するヘイトクライムを禁止する法律の採決では、保守党員の大半が反対票を投じた (Epprecht and Brown 2017: 70)。

8 GBA+について詳しくは次のURLを参照。Status of Women Canada, “What is GBA+?” (Retrieved November 18, 2017, <https://www.swc-cfc.gc.ca/gba-acis/index-en.html>)

年に右派のカナダ同盟と中道右派の進歩保守党の合併により誕生し、その支持層に伝統的な家族の価値を重視する社会的保守層から小さな政府を好む経済的保守層までを含む (Brown 2018: 148-9)。

外交面では自由党が多国間協調を重視する国際主義を、保守党が武力行使に制約を設けない軍事主義を、それぞれ志向する (Gravelle et al. 2014: 116)。自由党は、冷戦期に平和維持活動の創設と参加などを通じて「誠実な仲介者」(honest broker)として国際的評価を積み重ねてきた。冷戦後は、自由、民主主義、人権、法の支配を「カナダ人の価値」(Canadian values)と呼び、その海外普及が国際平和の礎になるとして外交目標に掲げられた (Canada 1995)。この目標は保守党にも共有されたものの、ハーパー首相はその手段としてそれまでの国連中心の外交を弱腰と非難し、「道徳的美徳と戦争の武勇に根付いた強い明確な信念を持つ外交政策」の必要性を訴えた (Paris 2014: 284)。実際、彼の言葉を裏付けるように、第二次世界大戦以来最大の軍事予算を計上し、行き詰まりを見せていたアフガニスタンへの2011年までの軍の駐留延長の承認を取り付け、2011年のリビアへの空爆にも空軍を積極的に派遣するなどした (Smith 2012: 22-3)。いずれの軍事ミッションもカナダ人の価値の普及が大義に掲げられた (Boucher 2009; Cooper and Monani 2014)。

軍事主義への傾倒は、ハーパー首相の歴史観からも明白であった。彼は、強い信念に基づく外交を「誇らしい軍の歴史」(Whyte 2011)に由来するものとして次の歴史解釈をメディアとのインタビューで披

露した。まず、カナダ人の価値の起源は、自由党が主張する冷戦期ではなく、1812年の米英戦争にまでさかのぼるとした。そして、当時まだ主権国家ではなかったカナダ国土を防衛した兵士達 (アングロフォン、フランコフォン、先住民) の犠牲にこそ、今日の言語や文化の多様性に根ざした国民としてのアイデンティティの拠り所が見出されるべきであると主張した (Sjolander 2014: 156-8)。このような国民史の政治的修正は、ハーパー首相の目指す外交にフィットするように、カナダ人のアイデンティティを「誠実な仲介者」から「戦士の国民」(the warrior nation)へと切り替えることを国民に奨励する意図を含むものであった (Sjolander 2014: 158-60)。

批判的国際関係論の見地 (Campbell 1998; Howell 2005) から言えば、そのような上からのアイデンティティの書き換えは、特定の集団を脅威として他者化することで、国内の多様な社会集団を一個の国民的主体へと均質化するための安全保障化の一部として捉えられる。すなわち、その集団とは、カナダ人の価値を共有しない、とされる人々である。ハーパー首相にとって世界は、その価値を共有する文明化された者とそうでない者とに分類される非常にシンプルなものであり、彼によれば、「それらの価値〔自由、人権、民主主義、法の支配〕を促進する社会は、我々の利益を共有する傾向にあり、そうでない社会は、頻繁ではないにせよ時折カナダ人の脅威となる」(Whyte 2011, []内は筆者による加筆)。したがって、カナダ人はもはや仲介者という第三者としてではなく、当事者として“野蛮な他

者”に対峙していかなければならないというのである。次章では、ハーパー政権がいかにかにWPS アジェンダに取り組むのか見ていこう。

Ⅲ. 軍事主義とジェンダー・エッセンシャルイズムの交錯

カナダ外交にとってSCR1325は、ハーパー政権以前の自由党政権が国際的に推奨してきた人間の安全保障の一環として取り組まれ、その実績が積み重ねられてきた。ところが、2005年の政権交代により、NAPの編纂は保守党政権の下で行われることになった。その公表には、政権発足からおよそ3年を要することになったが、レベッカ・ティッセン (Rebecca Tiessen) らによる関係者へのインタビューによれば、「その行動計画は2006年から2007年に書かれたが、文言をめぐる議論のために2009年まで公表できなかった」(Tiessen and Carrier 2015: 106)。その文言の一つが、WPSの中心的概念であるはずのジェンダーであった⁹。具体的には、ジェンダー平等の代わりに「女性と男性との間の平等」が用いられ、ジェンダー暴力の代わりに「女性に対する暴力」が用いられた (Canada 2010; Tiessen 2015b: 90-93)。このシフトは、上からの通達によるものというよりも閣僚と官僚との間でのやりとりから徐々に始まった。外務国際貿易省 (Department of Foreign Affairs and International Trade) やカナダ国際開発庁 (Canadian International Development Agency)

の官僚は、担当大臣の間でのジェンダーに対する誤解や不快感に遭遇し、その問題が現政権の支持層に好ましくないフェミニストのアジェンダであるという認識を共有していた (Tiessen and Carrier 2015: 100, 103-5)。

ジェンダーの使用の回避は、ティッセンが「ジェンダー・エッセンシャルイズム」(gender essentialism)と呼ぶ次の特徴においてNAPを後退させた。それは、女性を子どもとともに援助を必要とする「脆弱」、「無力」、「依存」に特徴づけられる「犠牲者」として把握する反面、平和の再建に貢献するエイジェンシーとしての側面を見えなくする (Tiessen 2015b: 93, 95-7)。その結果、教育や医療の分野での物資やサービスを供給する援助が増えた一方、女性を和平プロセスや復興支援の意思決定などから排除するジェンダー不平等な構造の改革は、政策的視野の外へと押し出された。

その一例にアフガニスタンでの援助が挙げられる (和田 2010: 46-7)。2008年からカンダハールで地方復興チーム (provincial reconstruction team, PRT) による「シグナチャー・プロジェクト」(signature projects) が開始された。それはダムと運河の修復に、学校建設とポリオ予防接種を加えた三つから構成される。これらが選択された理由は、地元の住民にとって最も切実なニーズに応えるためであると説明された (Canada 2008: 10-1)。学校の建設と修復の目的は、それまで教育から排除されてきた女性の識字率を向上させることであり

9 そのNAPでは、ジェンダー平等という言葉は二度使用されているものの、いずれも国際社会の議論として触れられるのみである。

(Canada 2008: 5-6, 11)、5歳以下の子どもを対象としたポリオ予防接種は、女性と子どもの医療へのアクセス拡大を重視するカナダの人道援助の一環であることが強調された (Canada 2008: 12)。

このプロジェクトは、母親への支援を好む社会的保守層だけではなく、経済的保守層にも、また軍事主義を支持する層にも歓迎される内容を含んだ。経済的保守層にとって対外援助の用途は、費用対効果により評価されるべきものであり、事前に数値化された成果を短期間に達成できるプロジェクトが好まれた (Tiessen 2016: 197)。自由党政権時代の援助の多くは、国際機関、NGO、アフガニスタン政府などと連携したマルチ・ドナー・プロジェクトに配分されており、その効果や用途についてハーパー政権下で厳しい批判に晒された (Canada 2006: 29-30; Canada 2007: 8)。しかも、こうした批判は国防省から上がってきたものでもあった。当時のカンダハールはタリバンの拠点であり、カナダ軍もその掃討作戦に参加していたが、戦闘の巻添えによる市民の死傷者数の増加が、住民の協力を得ることを妨げていると考えられた。それゆえ、短期的に成果の見込めるプロジェクトに援助を集中させ、住民に生活改善を実感させることで、武装勢力から切り離すことが目指された (和田 2010: 46-8)。つまり、武力行使を目的に、女性は〈犠牲者〉であることを求められたのである。

IV. 〈カナダ人の価値〉を通じたピンクウォッシング

上述のようにハーパー政権は、支持層を強く意識した外交を展開するのだが、LGBTの人権問題はその例外であった。2009年のウガンダへの批判を皮切りに、ロシア、イラン、ナイジェリア、カリブ海諸国など同性愛を違法化する政府を非難した (Epprecht and Brown 2017: 73)。その方針はWPSへの取り組みにも反映され、LGBTの人々への暴力は、NAPの進捗状況に関する四本の報告書のうち二本で言及された。一つは、脆弱国家支援の優先課題として「宗教的自由とLGBTの権利を含む人権と基本的自由の保護」を挙げ (Canada 2016)、もう一つは、イスラム国の問題としてシリアとイラクでLGBTの人々への暴力がテロの戦術として使用される状況を取り上げた (Canada 2017)。

ハーパー政権でその批判の急先鋒に立ったのが2011年から2015年まで外務大臣を務めたジョン・ベアード (John Baird) である。「国家の役割とは、ジェンダー、セクシュアリティ、信仰に関わらず、その人民を守ることであり私は固く信じる」 (National Post 2013) という彼の主張は、非難した政府からだけでなく、国内の支持層からも反発を招いた。非営利組織リアル・ウィメン (REAL Women)¹⁰は、セクシュアリティに関する個人的見解を広めるために外務大臣という立場や税金を使っていると批判し、「ベアードの行動はカナダの保守

10 リアル・ウィメンは1983年に創設され、同性婚反対など異性愛家族を社会の基本単位とする保守運動を展開してきた。1998年に国連経済社会理事会での特殊諮問資格 (special consultative status) を得る。Real Women of Canada (Retrieved March 20, 2018, <http://www.realwomenofcanada.ca/>)

地盤に破壊をもたらすものであり、彼の党も巻き添えにする」と訴えた (MacKinnon 2013)。この反発に対して、ベアードは次の声明を発表した。「人権の促進と保護は、カナダの外交政策の不可欠な一部である。カナダは人権のために立ち上がる。自由、民主主義、人権、法の支配を促進する重要な問題に関して信念に基づいた立場を取る」 (MacKinnon 2013)。つまり、LGBTの人権はカナダ人の価値に組み入れられたのである。

ここで浮かぶ問いとして、支持者の反発を抑えてまで、なぜハーパー政権は「LGBTフレンドリーな政府」として振る舞おうとしたのか。というのも、野党時代の保守党にとっても、その権利拡大は受け入れ難いアジェンダであったからである。2005年の同性婚合法化の採決で、賛成票を投じた保守党議員は96人中わずか3名であり、ハーパー自身も反対票を投じていたほどである (Epprecht and Brown 2017: 70)。ところが政権獲得後、LGBTの人権はベアードの言葉を借りれば、もはや「左翼対右翼の問題ではない。カナダの大多数に支持される立場」 (MacKinnon 2013) になったというのである。

マーク・イプレクト (Mark Epprecht) とスティーブン・ブラウン (Stephen Brown) は、こうした保守党政権の変化の理由に国内外の政治的利点を挙げる (Epprecht and Brown 2017; Awwad 2015: 20)。まず、対内的にLGBTに不寛容な政党と見なされることは、従来の支持層以外からの票を獲得する上でも、支持層内のLGBTに寛容な有権者に対しても選挙で逆効果になる (Epprecht

and Brown 2017: 80-2)。1990年代の初めから着実にLGBTの差別解消に向かう国内の流れを逆転させることは困難であり、その証左にハーパー首相は、2005年に合法化された同性婚の賛否について、彼の在職期間中に再び投票にかけないことを約束した (National Post 2012)。次に、対外的にLGBTに寛容な政府と見なされることは、〈誠実な仲介者〉の辞退により低下した国際的評価の回復に役立つと見込まれた (Epprecht and Brown 2017: 80)。また、同性婚を合法化する先進国が増えるなか、ハーパー政権は「ピア・プレッシャーに結果的に服従した」とイプレクトらは指摘する。その流れへの逆行は、LGBTの権利承認により得られる「近代的、寛容な、多元主義的、民主的な体制の証」を失うことになるからである (Epprecht and Brown 2017: 80)。

だが、その寛容さの内外へのアピールは、政権イメージをソフトにするためだけではなく、特定の集団を脅威として認知させるためでもあった。カナダでは、冷戦期にゲイと見なされた軍の関係者は、東側にスパイとして利用されやすいという理由により安全保障上の脅威として取り締まられた (Kinsman and Gentile 2010)。ところが、いまではLGBTの人権は、カナダ人の価値というナショナルなフレームを通して擁護される。したがって、本土への直接的脅威でなくとも、その価値を侵害するホモフォビックな集団は、カナダ人が〈戦士の国民〉として対峙すべき脅威であると喧伝される。

その安全保障化の過程は、対イスラエル政策の転換に顕著に現れた。カナダの歴代

政権は中立的立場を保ちつつ、パレスチナ問題に関する国連決議を遵守するようイスラエルに求めてきた (Smith 2012: 24-5)。だが、ハーパー首相にとって、そのような〈誠実な仲介者〉に徹する外交は信念を欠くものであり、カナダ人の価値を共有する西洋民主主義国としてのイスラエルへの無条件の支持こそがその信念に合致するものであった (Whyte 2011)。その姿勢は、2012年のイランの核開発をめぐる対立でも貫かれた。ベアードは、「カナダはイラン政府をグローバルな平和と安全への最も重大な脅威と見なす」と述べ (Palmer and Ljunggren 2012)、2012年9月にイランのカナダ大使館閉鎖とカナダ駐在のイラン外交官の国外退去を宣言した。イスラエルによるイランへの先制攻撃の検討など、両国間の軍事的緊張が高まるなか、ハーパー政権はイスラエルに平和的手段による解決を求めながら (Fitzpatrick 2012)、イランのLGBTの人々の惨状を国民に訴え、その難民政策の見直しを発表した。「過酷な刑罰と語られない暴力が、人々が誰を愛するのか、人々が何者であるのかを理由に加えられている」というベアードの演説を受けて (Hopper 2012)、2008年から2013年までシチズンシップ・移民・多文化主義大臣を務めたジェイソン・ケニー (Jason Kenny) は次の方針を発表した。「我が保守党政権が、カナダの移民の歴史で先例のないゲイとレズビアンの人々の難民保護に重点を置くことを誇

りに思う。(中略) 特に我々は、イランでの頻繁な暴力的迫害から新たに安全なカナダでの生活を始めるために逃げてきたゲイの難民を救済する先頭に立つ」(CBC News 2012)¹¹。

ところで、この方針は、カナダ国内のLGBTコミュニティのメンバーに電子メールで直接伝えられた。そのため、政府が個人のメールアドレスをいかに特定したのかという不信感が受信者の間で高まるなか、次の批判を招いた。「ケニーの電子メールは、イランとの戦争をけしかける保守党政権の見え透いた願望を『ピンクウォッシング』する下手な企てである」(CTV News 2012)。ピンクウォッシングとは、反移民や反イスラムを唱える勢力によるゲイの権利の政治利用を意味する (Schulman 2011)。たとえば、イスラエルはテルアビブを中東で唯一プライド・パレードを開催する観光都市として売り込むことで、LGBTフレンドリーな政府として対外的にアピールする。ただし、そのプロモーションは自らを先進的な民主主義国としてイメージさせることにより、パレスチナの占領とその市民への暴力から国際社会の注意を逸らそうとするものだと批判される。プアによれば、ピンクウォッシングとは、長く使われてきた〈犠牲者〉というレトリックによる「帝国の／人種的な／国家の暴力」を正当化する術のひとつに過ぎない。かつての植民地支配は、「人種化された他者」からの女性

11 ハーパー政権は、移民のガイドライン『ディスカバー・カナダ』から同性婚に関する記述を2009年の改定で一旦削除していたにもかかわらず (Awwad 2015: 19-20)、2011年に再び改定された際に次の一文を加えた。「カナダの多様性はゲイとレズビアンのカナダ人を含み、婚姻へのアクセスを含めた法の下での十分な保護と平等の取り扱いを受ける」(Citizenship and Immigration Canada 2011: 13)。

や子どもの保護を理由に正当化されてきたが、現在はLGBTの人々がその保護を待つリストに加えられる (Puar 2013: 337-8)。

前述のケニーの電子メールがピンクウォッシングであると受信者から批判された理由は、〈犠牲者〉としてのイランのゲイとレズビアンにカナダ国民、とくにLGBTの人々の目を向けさせ、先制攻撃も検討するイスラエル支持の世論を作り出そうとするハーパー政権の意図を看取されたことにある。その意図を持たずとも、疑われるまでに、同政権はピンクウォッシングに通底するイスラモフォビアをイラン以外にも向けてきた実績を持っていた¹²。たとえば、イランによるLGBTの人々への人権侵害が声高に叫ばれた反面、イスラエルによるパレスチナ人への人権侵害には沈黙を続けた。2008年2月下旬から3月上旬に、イスラエル軍は女性と子どもを含む約120人のパレスチナ人を殺害した。国連人権委員会は、この武力行使を国際人道法違反としてイスラエルに対する非難決議を採決したが、47か国のうち、33か国が賛成を、13か国が棄権を選択するなか、反対を表明したのはイスラエルの自衛権を支持するカナダのみであった (United Nations 2008)。ハーパー政権が保護を申し出る〈犠牲者〉を、女性、子ども、そしてLGBTの人々へと拡大しても、カナダ人の価値を共有しないと

される側にある人々は、法の支配の外側へと追いやられたのである。

V. おわりに

対象者の拡大と軍事主義への傾倒というWPSにおける近年の二つの変化は、LGBTの人々の保護が武力行使の口実となることへの懸念を生じさせている。本稿は、これらの変化が並行して生じたカナダのハーパー政権を事例に、WPSの保守のアジェンダへの再構成がその懸念に現実味を帯びさせる下地となることを論じてきた。

国際協調から軍事主義への外交方針の転換を図るなか、ハーパー政権は、カナダ人の価値を共有できないと見なした特定の集団を脅威として安全保障化することにより、国民としてのアイデンティティを〈誠実な仲介者〉というフェミニンな主体から〈戦士の国民〉というマッチョな主体への変容を促そうと試みた。保守政権の誕生によるWPSへの影響は、そのNAPからジェンダーを削除させ、カンダハールでは対テロ戦争の効果的な任務遂行に向けて、ジェンダーの視点を主流化させることよりも、女性に〈犠牲者〉でいることを求める本質主義を主流化させた。その〈犠牲者〉のリストにLGBTの人々が加えられたことは、異性愛家族を社会の基本単位と考える野党時代の主張や伝統的な支持層の意向と大き

12 ハーパー首相は2011年9月のメディアによるインタビューで、同時多発テロから10年を経た現在のカナダにとって「最大の脅威がイスラム原理主義」であり、その思想に由来するテロリズム、とりわけホーム・グロウン・テロへの監視が重要であると述べた (CBC News 2011)。さらに2016年の総選挙では、市民権承認式 (citizenship ceremonies) における女性のベール (ニカブ) の着用禁止に加え、「名誉殺人」、性器切除、強制的な婚姻など女性の人権を侵害する行為を「野蛮な文化的実践」と呼び、それらの通報制度の整備を公約に掲げた (Barber 2015; Ahmad 2017: 261)。

く乖離する。だが、その動機は、自らのホモフォビアとトランスフォビアの克服によるというよりも、むしろイスラモフォビアを上回らせたことによるものである。そのピンクウォッシュされた安全保障化の言説は、カナダ人の価値を受け入れないとされる他者への暴力や排除を正当化する新たなリソースとして開拓された。

各政府がNAPを国益や国内事情を優先して編纂することが問題視されるなか、政

権交代がWPSの解釈や実践に影響を及ぼすことを明らかにしてきた。それまで武力紛争の生じた側の国内政治に目が向けられてきたが、今日ではWPSを持ち込む側の国内政治の変動をいかに抑制するかが、その初期の構想の形骸化を防ぐ上での重要な課題となりつつある。インターセクショナル・アプローチを適用すべき対象は、被支援国だけでなく、支援国も含まれるべきではないか。

参考文献

- Ahmad, Aisha, 2017, "Canadian values and the Muslim world", *International Journal*, 72(2): pp. 255-68.
- Awwad, Julian, 2015, "Queer regulation and the homonational rhetoric of Canadian exceptionalism", in OmiSoore H. Dryden and Suzanne Lenon eds., *Disrupting queer inclusion: Canadian homonationalisms and the politics of belonging*, Vancouver: UBC Press, 19-34.
- Barber, John, 2015, "Canada's conservatives vow to create 'barbaric cultural practices' hotline", *The Guardian*, October 2 2015, (Retrieved September 2, 2018, <https://www.theguardian.com/world/2015/oct/02/canada-conservatives-barbaric-cultural-practices-hotline>).
- Basu, Soumita, 2016, "Gender as national interest at the UN security council", *International Affairs*, 92(2): pp. 255-73.
- Boucher, Jean-Christophe, 2009, "Selling Afghanistan: A discourse analysis of Canada's military intervention, 2001-2008", *International Journal*, 64(3): pp. 717-33.
- Brown, Stephen, 2018, "All about that base? Branding and the domestic politics of Canadian foreign aid", *Canadian Foreign Policy Journal*, 24(2): pp. 145-64.
- Buzan, Barry, Ole Wæver and Jaap de Wilde, 1998, *Security: A new framework for analysis*, Boulder, Colo: Lynne Rienner.
- Campbell, David, 1998, *Writing security: United States foreign policy and the politics of identity*, Minneapolis: University of Minnesota Press.
- Canada, 1995, *Canada in the world: Government statement*, Ottawa.
- . 2006, *Managing turmoil: the need to upgrade Canadian foreign aid and military strength to seal with massive change*, An interim report of the standing senate committee on national security and defence, Ottawa.
- . 2007, *Canadian troops in Afghanistan: Taking a hard look at a hard mission*, An interim report of the standing senate committee on national security and defence, Ottawa.
- . 2008, *Canada's engagement in Afghanistan: Setting a course to 2011*, Report to Parliament, Ottawa.
- . 2010, *Canada's action plan for the implementation of United Nations security council resolutions on women, peace and security 2010-2016*, Department of Foreign Affairs and International Trade, Ottawa, (Retrieved September 2, 2018, https://www.international.gc.ca/world-monde/issues_

- development-enjeux_developpement/gender_equality-egalite_des_genres/wps-fps-2011-2016.aspx?lang=eng).
- . 2016, *2014-2015 Progress report: Canada's action plan for the implementation of United Nations security council resolutions on women, peace and security*, Ottawa, (Retrieved September 2, 2018, http://international.gc.ca/world-monde/issues_developpement/gender_equality-egalite_sexes/women_report-rapport_femmes-2014-2015.aspx?lang=eng).
- . 2017, *2015-2016 Progress report: Canada's national action plan for the implementation of United Nations security council resolutions on women, peace and security*, Ottawa, (Retrieved September 2, 2018, http://international.gc.ca/world-monde/issues_developpement/gender_equality-egalite_sexes/women_report-rapport_femmes-2015-2016.aspx?lang=eng).
- Carpenter, R. Charli, 2006, "Recognizing gender-based violence against civilian men and boys in conflict situations," *Security Dialogue*, 37 (1): pp. 83-103.
- CBC News, 2011, "Harper says 'Islamicism' biggest threat to Canada", September 6, 2011, (Retrieved September 2, 2018, <https://www.cbc.ca/news/politics/harper-says-islamicism-biggest-threat-to-canada-1.1048280>).
- . 2012, "Jason Kenney's mass email to gay and lesbian Canadians", September 21, 2013, (Retrieved September 2, 2018, <https://www.cbc.ca/news/politics/jason-kenney-s-mass-email-to-gay-and-lesbian-canadians-1.1207144>).
- Citizenship and Immigration Canada, 2011, *Discover Canada: The rights and responsibilities of citizenship*, Ottawa: Government of Canada, (Retrieved September 2, 2018, http://publications.gc.ca/collections/collection_2011/cic/Ci1-11-2011-eng.pdf).
- Collier, Cheryl, 2014, "Not quite the death of organized feminism in Canada: Understanding the demise of the national action committee on the Status of Women", *Canadian Political Science Review*, 8(2): pp. 17-33.
- Cooper, Andrew F. and Bessma Momani, 2014, "The Harper government's messaging in the build-up to the Libyan intervention: Was Canada different than its NATO allies?", *Canadian Foreign Policy Journal*, 20(2): pp. 176-88.
- CTV News, 2012, "Critics accuse Kenney of 'pinkwashing' in targeted emails", September 25, 2012, (Retrieved March 26, 2019, <https://www.ctvnews.ca/politics/critics-accuse-kenney-of-pinkwashing-in-targeted-emails-1.970259>).
- Epprecht, Marc and Stephen Brown, 2017, "Queer Canada? The Harper government and international lesbian, gay, bisexual, transgender, and intersex rights", in Rebecca Tiessen and Stephen Baranyi eds., *Obligations and Omissions: Canada's Ambiguous Actions on Gender Equality*, Montreal and Kingston: McGill-Queen's University Press, 69-90.
- Fitzpatrick, Meagan, 2012, "Harper takes cautious tone over Israeli stance on Iran", *CBC News* March 2, 2012, (Retrieved March 26, 2019, <https://www.cbc.ca/news/politics/harper-takes-cautious-tone-over-israeli-stance-on-iran-1.1243417>).
- Gravelle, Timothy B., Thomas J. Scotto, Jason Reifler and Harold D. Clarke, 2014, "Foreign policy beliefs and support for Stephen Harper and the conservative party", *Canadian Foreign Policy Journal*, 20(2): pp. 111-30.
- Hagen, Jamie J., 2016, "Queering women, peace and security", *International Affairs*, 92(2): pp. 313-32.
- Hopper, Tristin, 2012, "Warriors for gay rights: The Conservatives have become unlikely LGBT supporters", *National Post*, September 22, 2012, (Retrieved September 2, 2018, <https://nationalpost.com/news/>)

- canada/warriors-for-gay-rights-the-conservatives-have-become-unlikely-lgbt-supporters).
- Howell, Alison, 2005, "Peaceful, tolerant and orderly? : A feminist analysis of discourses of 'Canadian values' in Canadian foreign policy", *Canadian Foreign Policy*, 12(1): pp. 49-69.
- Kinsman, Gary and Patrizia Gentile, 2010, *The Canadian war on queers: National security as sexual regulation*, Vancouver: UBC Press.
- Kirby, Paul and Laura J. Shepherd, 2016, "The future past of the women, peace and security agenda", *International Affairs*, 92(2): pp. 373-92.
- MacKinnon, Leslie, 2013, "Women's group slams Baird over anti-gay laws stance", *CBC News*, August 7, 2013, (Retrieved September 2, 2018, <https://www.cbc.ca/news/politics/women-s-group-slams-baird-over-anti-gay-laws-stance-1.1326628>).
- National Post, 2012, "Same-sex marriage in Canada will not be revisited, Harper says", January 12, 2012, (Retrieved September 2, 2018, <https://nationalpost.com/news/canada/same-sex-marriage-in-canada-will-not-be-revisited-harper-says>).
- . 2013, "Canadian conservatives divided over Harper government's defence of gay rights", August 10, 2013, (Retrieved September 2, 2018, <https://nationalpost.com/news/politics/canadian-conservatives-divided-over-harper-governments-defence-of-gay-rights>).
- Palmer, Randall and David Ljunggren, 2012, "Canada closes embassy in Iran, to expel Iranian diplomats," *Reuters*, September 8, 2012, (Retrieved September 2, 2018, <https://www.reuters.com/article/us-canada-iran-idUSBRE8860QC20120907>).
- Paris, Roland 2014, "Are Canadians still liberal internationalists? Foreign policy and public opinion in the Harper era", *International Journal*, 69 (3): pp. 274-307.
- Pratt, Nicola and Sophie Richter-Devroe, 2011, "Introduction: Critically examining UNSCR 1325 on women, peace and security", *International Feminist Journal of Politics*, 13(4): pp. 489-503.
- Puar, Jasbir K., 2007, *Terrorist assemblages: Homonationalism in queer times*, Durham: Duke University Press.
- . 2013, "Rethinking homonationalism", *International Journal of Middle East Studies*, 45 (2): pp. 336-9.
- Schulman, Sarah, 2011, "Israel and 'pinkwashing'", *New York Times*, November 22, 2011, (Retrieved March 26, 2019, <https://www.nytimes.com/2011/11/23/opinion/pinkwashing-and-israels-use-of-gays-as-a-messaging-tool.html>)
- Shepard, Laura J., 2016, "Making war safe for women: National action plans and the militarization of the women, peace and security agenda", *International Political Science Review*, 37 (3): pp. 324-35.
- Sjoberg, Laura and Sandra Via, 2010, "Introduction", in Laura Sjoberg and Sandra Via eds., *Gender, War and Militarism: Feminist Perspectives*, CA: Prager, 1-16.
- Sjolander, Claire Turenne, 2014, "Through the looking glass: Canadian identity and the war of 1812", *International Journal*, 69 (2): pp. 152-67.
- Smith, Jordan Michael, 2012, "Reinventing Canada: Stephen Harper's conservative revolution", *World Affairs*, 74 (6): pp. 21-8.
- Swaine, Aisling, 2009, "Assessing the potential of national action plans to advance implementation of United Nations security council resolution 1325", *Yearbook of International Humanitarian Law*, 12: pp. 403-33.
- Tiessen, Rebecca, 2015a, "'Walking wombs': Making sense of the Muskoka initiative and the emphasis on motherhood in Canadian foreign policy", *Global Justice: Theory Practice Rhetoric*, 8 (1): pp. 74-93.

- . 2015b, “Gender essentialism in Canadian foreign aid commitments to women, peace, and security”, *International Journal*, 70(1): pp. 84-100.
- . 2016, “Gender equality and the ‘two CIDAs’: Success and setbacks, 1976-2015”, in Stephen Brown, Molly den Heyer and David R. Black, *Rethinking Canadian Aid*, second edition, Ottawa, University of Ottawa Press, 189-204.
- Tiessen, Rebecca and Krystal Carrier, 2015, “The erasure of ‘gender’ in Canadian foreign policy under the Harper conservatives: the significance of the discursive shift from ‘gender equality’ to ‘equality between women and men’”, *Canadian Foreign Policy Journal*, 21(2): pp. 95-111.
- UNHCR, 2017, *We keep it in our heart: Sexual violence against men and boys in the Syria Crisis*, November 22, 2017 (Retrieved September 2, 2018, https://data2.unhcr.org/es/documents/download/60864#_ga=2.190224168.2010221577.1512868372-87730628.1512868372).
- United Nations, 2008, Human rights situation in Palestine and other occupied Arab territories, A/HRC/7/L.1, 5 March, 2008, (Retrieved March 27, 2019, <https://unispal.un.org/DPA/DPR/unispal.nsf/fd807e46661e3689852570d00069e918/ef96bd2cae29561c85257405004d0082?OpenDocument>).
- . 2013, *Report of workshop on sexual violence against men and boys in conflict situations*, Office of the United Nations Special Representative of the Secretary-General on Sexual Violence in Conflict, New York, 25-26 July 2013.
- 和田賢治, 2010, 「グローバルな生政治の中の「女性」——カンダハールにおけるカナダの復興支援チームを事例に」『国際政治——ジェンダーの国際政治』161号: pp. 41-53.
- . 2019, 「国際関係論のクィアの転回——LGBTをめぐるグローバルな秩序の再編性」『国際政治——国際政治研究の先端16』196号: pp. 133-43.
- Whyte, Kenneth, 2011, “In conversation: Stephen Harper”, *Maclean's*, July 5, 2011, (Retrieved September 2, 2018, <https://www.macleans.ca/general/how-he-sees-canadas-role-in-the-world-and-where-he-wants-to-take-the-country-2/>).

(掲載決定日: 2019年5月29日)

Abstract

The Reconstitution of Women, Peace and Security as a Conservative Agenda: The Case of the Harper Government in Canada

Kenji Wada

Women, peace and security (WPS) enabled the international society to recognize and discuss violence based on the norms and structure of gender inequality under armed conflicts as a security issue. This idea, which originated from women's peace movements and feminist studies, currently faces two transformations: the expansion of its target to male and lesbian, gay, bisexual and transgender (LGBT) victims and the devotion to militarism. The combination of these transformations raises the issue that governments may depend on WPS to justify the use of force against their enemies by superficially claiming to save LGBT people in the future. This article examines WPS under the Harper government in Canada to clarify the background of this potential risk. Harper's administration was initially less concerned about WPS and LGBT population because of the government's conservative, anti-feminist, and homophobic supporters. Nonetheless, the Harper administration later began to address women's needs through its aid programs and criticize governments that criminalized homosexual acts. Through the lens of gender essentialism and pinkwashing, this article explores how the Harper government securitized LGBT issues in its reconstitution of WPS as a conservative agenda.

Keywords

Women, Peace and Security, Canadian values, securitization, gender essentialism, pinkwashing